

論 文

音楽経験者・未経験者における読譜力育成に向けた取り組み(第2報) 考案課題のデータ分析を中心に

二宮貴之・櫻井琴音

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成23年11月30日受理)

Effort to Nurture Score Reading Ability of Experienced and Inexperienced Groups in Music (Part2) Focus on Data Analyses of Designed Assignments

Takayuki NINOMIYA and Kotone SAKURAI

(Faculty of Children's Studies Department of Children's Studies)

(Accepted November 30, 2011)

Abstract

In this time's research, we conducted an approach to nurture music reading ability of students with and without music experience. The contents of the approach is, based on the survey on piano textbooks used in class, is to design and conduct assignments and analysed data obtained from them to examine to what extent students acquired music reading ability. The result of this time's research showed that students with less music learning experience steadily acquired music reading ability and accumulation of continuous trainings in both treble staff assignment and bass staff assignment nurtured their music reading ability steadily. In other words, we can say that even short-time approaches of about four minutes brought about useful results.

Key words : Score Reading Ability 読譜力
Music Education 音楽教育
Piano ピアノ
Teaching Materials Development 教材開発
Method of Instruction 指導法

I . はじめに

音楽のリテラシーである読譜に関しては、学習指導要領の中で一貫制のある教育課程での位置付けがなされており¹⁾⁶⁾、2009年には学会誌でも特集号として取り上げられるなど、音楽教育の中で長期的かつ重要性の高いものであるとされている。また音楽指導者にとって読譜力育成は普遍的なテーマであり、避けては通れない課題でもある。読譜指導に関する指導法の在り方については論議が進み、様々な方法で課題へのアプローチが行われてきているが、その解決への即効性のある指導法が確立されているとは言い難く、多くの音楽指導者にとって大きな課題となっている。筆者らも同様であり、保育者・教員養成校に入学してくる学生、特にピアノ等の学習経験がない学生たちの読譜力を育成することに関しては、常日頃の音楽指導を行う中で大変苦慮している。

本学では、入学直後に音楽学習経験に関するアンケート調査を実施している。平成22年度の本学子ども学部1年次生92名(男子44名、女子48名)を対象に実施したこの調査結果をみると、本学入学以前にピアノ等の個人レッスンおよび音楽系部活動の経験を有する学生(以下、経験者と記す)は92名中38名(41.3%)、個人レッスンや音楽系部活動の経験がない学生(以下、未経験者と記す)92名中54名(58.6%)となっており、未経験者数が経験者数を大きく上回っていた。この結果から筆者らは、読譜力が脆弱な学生が多数含まれている可能性が高い現状があると判断した。

音楽の学習者にとって読譜は、視唱、視奏などのソルフェージュの力の一つであり、音楽のリテラシーとして重要な位置を占めている。特に読譜力の脆弱さを抱える学生たちにとっては、音楽学習の初期段階で基礎的な音楽の力、つまり読譜力を育成させることは、その後の発展的な学習に取り組む上でも必要不可欠であると言える。ピアノ初心者の読譜力育成に関する先行研究の中で小倉は、「初心者がピアノの授業の中で適切な進度を確保できない理由の一つに、読譜力の脆弱さがあげられる」(2007)と述べている⁷⁾。また、Ku Wing Cheong は、「初見は音楽のリテラシーの中で重要な構成要素である。(中略)しかし、生徒に高いレベルの初見能力を身につけさせることは、マレーシアのピアノ教師が直面するもっとも難しい問題でもある⁸⁾」と、読譜を必要とする授業やレッスンでの読譜指導に関する課

題について述べている。このように音楽のリテラシーである読譜力を定着させることは、容易なことではないと言える。上記のように各養成校では、初見視奏からのアプローチによって読譜力を向上させる方法、質問調査を通して初見能力獲得のための要因、技能、学習教材等を分析する方法等による研究成果が報告されてきた。また、その他多くの教育機関で実践や実践研究が報告されるとともに、読譜力育成に関する研究の有用性や必要性が示されている⁹⁾¹⁰⁾。

養成校においては必ずピアノレッスンの授業が行われているが、過去の先行研究では、そこで使用しているテキスト内の教材との関連性を持たせた読譜課題の作成や長期的な継続を通して蓄積したデータをもとに、読譜力育成について論考した先行研究は散見されない。そこで筆者らは昨年度、第1報で報告した読譜力育成に向けた取り組みの成果を踏まえ、データの更なる蓄積を行った。

本研究では、第1報の継続研究として取り組んだデータ報告を行い、研究の成果について考察する。なお、本研究では独自に考案した読譜課題を使用しており、この課題の楽譜は巻末に掲載する。

II . 研究方法

1 . 対象

本学子ども学部子ども学科学生、平成22年度1年次生92名(男子44名、女子48名)

2 . 時期及び実施回数

平成22年4月～平成23年1月までの期間中(前期13回、後期14回)、計27回実施

3 . 読譜課題の実施方法

- ①毎回、「ピアノ」の授業開始直後に4種類の読譜課題(巻末資料①②③)を配布し、1課題1分間の制限時間の中でできるだけ沢山の階名を音符の下にドレミで書き込むよう指示した。
- ②課題①②は毎回課題難度に変化がない同一課題であり、それぞれA4用紙1枚ずつである。課題③④は毎回課題難度が変化するステップアップ課題でA4用紙一枚に2課題をまとめた。
- ③実施にあたり、配布した楽譜に氏名を記入させ、楽譜を裏返しにした状態で待機させ「はじめ」の合図とともに一斉に問題に取り組ませた。読譜課

題①②③④は、それぞれ1分間の制限時間を設け取り組ませ、課題①から②、課題②から課題③④に移行する際、学生は用紙を準備する時間が必要であるため、それぞれ5秒間の準備時間を設け「準備5、4、3、2、1、」と教員がカウントダウンを行い連続して行った。課題終了後、学生たちはピアノ担当教員に課題の提出を行った。

④4課題とも課題終了後答案用紙を回収し、非常勤講師を含め8名のピアノ担当教員が各自担当学生の課題を採点した。

⑤課題③④は毎回採点后に学生に返却し、満点になるまで取り組ませた。

Ⅲ．読譜課題実施概要について

1．読譜課題実施の展開

図1は、前期および後期に行った読譜課題要領を視覚化したものである。

課題①(ト音譜表課題)と課題②(ヘ音譜表課題)は前期13回後期14回の計27回実施し、それぞれ27回にわたって同一課題を継続的に取り組ませデータの蓄積を行った。課題③(ト音譜表課題)は課題の難度が段階的に変化する課題であり、2度音程～8度音程までを含む計7種類(1クール)の課題を前後期間27回のうちに4クール実施した。2クール目のみ6種類までの実施となっているのは、15回目の授業時に中間テストを実施したという授業構成上の理由によるものである。なお、1クール目に実施した

課題を2から4クール目でも課している。課題④(ヘ音譜表課題)は課題③と同様の方法で実施した。

2．学生の実態について

平成22年度1年次生92名(男子44名、女子48名)の学生に実施した音楽経験の有無に関する調査によると、先述したとおり経験者は92名中38名(41.3%)、未経験者は92名中54名(58.6%)と未経験者が経験者を大きく上回る数値を示していた。また、未経験者の学生の中には楽譜を見ても階名が読み取れない学生も含まれていた。そのような学生がある程度の速度で楽譜が読めるような力量を習得できるか否かは、楽譜を使用する音楽の授業全般における学習内容の理解度に影響を及ぼしかねない。

また、経験者の学生の中にもト音譜表の楽譜を読む際に下第1線のドから順次数えながら個々の音を読んでいた学生もいたことから、音楽の学習経験を有する学生であっても楽器の演奏に活かせる程度の読譜力が定着しているとは言い難いケースも存在していた。このような学生の実態を考慮すると、階名、リズム、視唱、視奏など多岐にわたる読譜力の中でも、特にドレミでの階名読みに注力し着実に力を定着させることが喫緊の課題である。

3．読譜課題の作成について

学生たちの読譜力育成を図るための取り組みとして、まずドレミでの階名読みに注力することとしたが、問題は読譜力育成のための読譜課題であった。

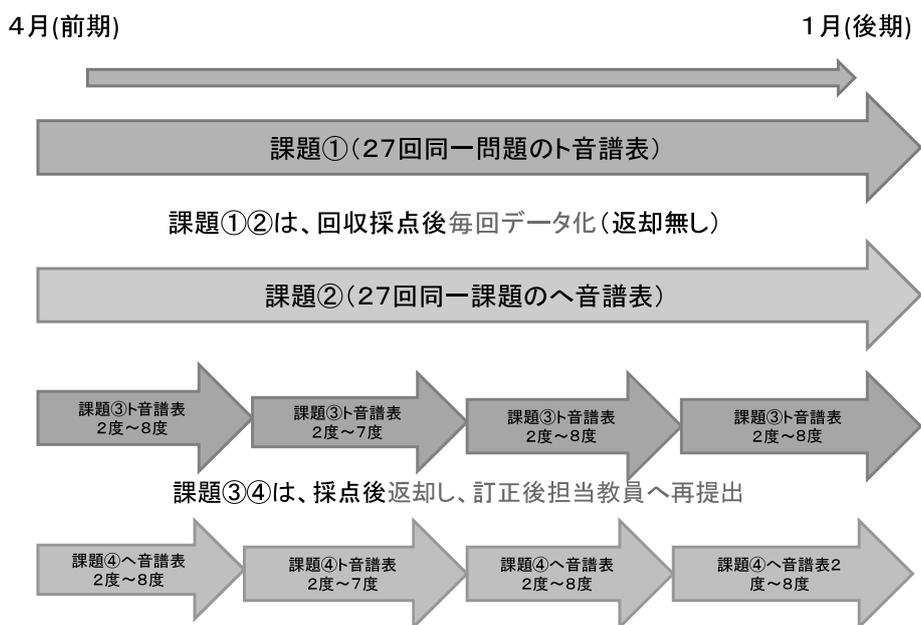


図1 読譜課題の視覚化

そこで、読譜指導をピアノの授業で行うということから、ピアノの授業で使用するテキストの曲の音域を中心に分析し、その結果をもとに読譜課題を作成することとした。

まず、ピアノテキストの中にはピアノ曲と弾き歌い曲があり、本学の学生が使用するピアノ曲は50曲、弾き歌い曲は11曲である。ピアノ曲50曲中、ト音譜表の最高音は「上第5間ラ」、最低音「下第3間ソ」、ヘ音譜表における最高音「上第3線ソ」、最低音「下第4線ファ」であった。一方、弾き歌い曲11曲中、ト音譜表の最高音は「上第1間ソ」、最低音「下第1線ド」、ヘ音譜表における最高音は「上第2間レ」、最低音「下第4間ソ」であった。この結果からピアノ曲の方が弾き歌い曲よりも音域が広いという結果が明らかとなり、読譜課題にはト音譜表の最高音、最低音を入れ込むこととした。

また、同一課題である課題①②に関しては、問題の難度を均一化するために音程間隔を「2度」「4度」「5度」「3度」「8度」「6度」「7度」の順で循環する工夫を行っている。

4. 読譜課題について

読譜課題は全部で4種類（読譜課題①②③④）ある。課題①はト音譜表課題であり、最高音「上第5間ラ」、最低音「下第3間ソ」、4分の4拍子、4分音符で構成されており、合計小節数は35小節、140点満点である。この課題は、通年で計27回実施した際に毎回取り組ませた同一の課題であり、学生に実施後教員が採点し、学生の実力を測るために活用したいという意図から、あえて学生への返却は行わずデータの蓄積を行った。また、同一課題である課題①に関しては、問題の難度を均一化するために音程間隔が「2度」「4度」「5度」「3度」「8度」「6度」「7度」の順で循環する方法をとっている。

課題②はヘ音譜表課題であり、最高音「上第4間ラ」、最低音「下第4間ソ」、4分の4拍子、4分音符で構成されており、合計小節数は35小節である。この課題は、課題①同様に通年で計27回実施した同一課題であり、学生に実施後教員が採点し、学生への返却は行わずデータの蓄積を行った。返却を行っていない理由と課題の音程間隔については課題①と同様である。

課題③はト音譜表課題であり、難度が少しずつ上がるステップアップ課題である。この課題は、楽譜が読めない学生が段階的に読譜力を身に付けられる

よう配慮しており、順次進行の課題から始まり「3度」「4度」「5度」「6度」「7度」「8度」までを含む課題へと音程の幅が少しずつ広がっている。この課題は、課題③ ①～課題③ ⑦まで7種類あり、それぞれ4分の4拍子、4分音符で構成されており、合計小節数は10小節、40点満点で、年間27回実施した。この課題は回収後教員が採点し、データの入力を行った後学生に返却し、満点になるまで繰り返しピアノ指導担当教員へ提出することを求めた。

課題④はヘ音譜表課題であり、難度が少しずつ上がるステップアップ課題である。この課題は、課題③同様に楽譜が読めない学生が段階的に読譜力を身に付けられるよう配慮されており、2度まで含む課題（順次進行）から始まり3度4度5度6度7度8度まで含む課題へと音程の幅が少しずつ広がっている。この課題は、課題④ ①～課題④ ⑦まで7種類あり、それぞれ4分の4拍子、4分音符で構成されており、合計小節数は10小節、40点満点で、前後期間27回実施した。この課題は回収後教員が採点し、データの入力を行った後学生に返却し、満点になるまで繰り返し反復させた。

資料3は、読譜課題③④をまとめたものである。この課題は、課題③ ①～課題③ ⑦、課題④ ①～課題④ ⑦まで7種類ずつある。課題③④は同一音程間隔で構成されている。読譜課題③ ①及び読譜課題④ ①は2度まで含む課題（順次進行課題）である。読譜課題③ ②及び読譜課題④ ②は3度まで含む課題である。読譜課題③ ③及び読譜課題④ ③は4度まで含む課題である。読譜課題③ ④及び読譜課題④ ④は5度まで含む課題である。読譜課題③ ⑤及び読譜課題④ ⑤は6度まで含む課題である。読譜課題③ ⑥及び読譜課題④ ⑥は7度まで含む課題である。読譜課題③ ⑦及び読譜課題④ ⑦は8度まで含む課題である。

IV. 結果および考察

本稿では、平成22年度に通年で実施した読譜課題のデータを報告し、その推移をもとに以下の点についての検証を行う。

- 1) 毎回、同一の課題に反復して取り組ませた読譜課題①（ト音課題）および②（ヘ音課題）の詳細なデータの報告と分析を行うことを通して、学生たちの読譜力の定着を検証する。

2) 難易度が異なる読譜課題③(ト音課題)および④(ヘ音課題)の詳細なデータの報告と分析を行う。特に、1クールごとの変化を捉えることを通して、学生たちの読譜力の定着を検証する。

1. 課題①②の全体平均値

図2は課題①および②の全学生の平均値の推移を視覚的に捉えやすくするために、グラフ化したものである。

課題①の初回は29.8ポイント(以下、ポイントはpと略す)であり、課題②の初回(11.6p)と比較すると2.6倍高い数値から始まっており、入学当初における学生の読譜力は、ト音譜表の読譜力の方がヘ音譜表の読譜力よりも明らかに高い。課題①の8回目までの推移に目を向けると、2回目(31.1p)から3回目(34.1p)4回目(34.3p)5回目(37.8p)6回目(40.5p)7回目(41.1p)8回目(42.9p)という結果であった。毎回、徐々に数値は上昇傾向を示し続け、初回時の(29.8p)と8回目(42.9p)を比較すると、その伸び幅は1.4倍上昇していたことから、読譜指導開始から2カ月間は特に重要な時期であると言える。

9回目(42.5p)から10回目(44.8p)で数値はやや上昇し、11回目(43.2p)12回目(43.4p)13回目(44.3p)まで横ばいの数値を示す。9回目(42.5p)から夏休み前までの13回目(44.3p)までは、数値が横ばいとなっはいるものの、初回から8回目まで大きく上昇してきた数値を維持していることから、読譜力が定着し始めた時期であると考えられる。

夏期休業明けの授業初回日にあたる14回目の数値

は(42.6p)と下降し、9回目の(42.5p)とほぼ等しい数値を示していた。この数値の落ち込みの要因として、読譜に対する継続的な取り組みが、約2カ月間に渡って一時中断されたことが一因となっているという可能性が推察される。

その後の推移をみると15回目(45.2p)で数値が上昇し、16回目(45.7p)17回目(45.2p)18回目(45.2p)まで数値の横ばいが続く。19回目(46.9p)20回目(48.2p)で上昇が見られ、21回目(48.0p)22回目(47.7p)まで再び横ばいの数値となる。15回目から18回目の横ばいと19回目から22回目の横ばいの数値は、急激な変化はないが、なだらかな数値の上昇が見られる。このことから、以前よりも高いポイント上での読譜力が定着する時期だと言える。

23回目では(51.6p)と22回目(47.7p)と比べると数値がやや上昇し、24回目(50.9p)25回目(49.7p)とやや下降したが、26回目は(52.6p)まで上昇した。このポイントは最高得点である。

最終回の27回目では(51.7p)となった。初回(29.8p)と最終回(51.7p)のポイントと比較すると1.7倍の上昇がみられたことから、ト音譜表課題では大きく読譜力がついたと言える。

一方、ヘ音譜表課題②の初回は、(11.6p)から始まり、読譜課題①の初回(29.8p)と比較すると18.2p低い数値であったことから、ヘ音譜表の読譜力の脆弱さがより顕著に現れていた。しかしながら2回目(12.6p)から3回目(14.2p)4回目(17.6p)5回目(19.0p)6回目(20.2p)7回目(22.4p)8回目(25.6p)まで数値が常に上昇傾向を示した。初回(11.6p)と8回目(25.6p)を比較すると2.2

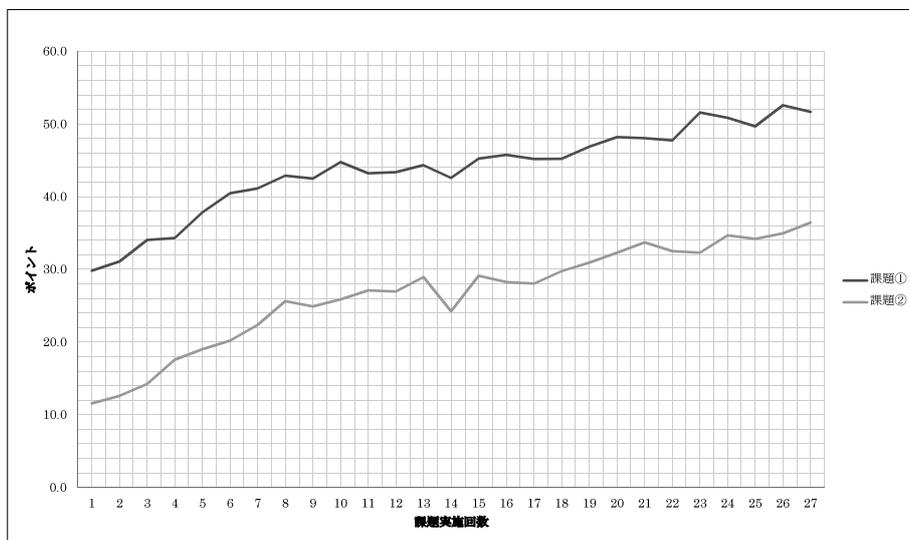


図2 課題①②全体平均値

倍の上昇が見られ、課題①の初回から8回目の1.4倍の上昇幅よりも大きく、へ音譜表課題の方がト音譜表課題より効果が如実に表れていた。

9回目(24.9p)は8回目(25.6p)と比べるとやや数値が下がるものの、10回目(25.9p)11回目(27.1p)12回目(27.0p)13回目(28.9p)までは、なだらかに上昇し続けた。夏期休業明け初回日の授業で実施した14回目の数値は(24.2p)というであり、4.7p下降していた。14回目の数値は、9回目の(24.9p)に近い数値であった。へ音譜表課題の夏期休業明けの数値は、ト音譜表課題よりも大きく下まわった。この結果から、ト音譜表の読譜力よりもへ音譜表の読譜力の方が落ちやすい傾向にあると言える。

その後15回目(29.1p)で数値が大きく上昇し、16回目(28.3p)でやや下降した。17回目から21回目までの数値は、17回目(28.0p)18回目(29.8p)19回目(30.9p)20回目(32.3p)21回目(33.7p)という結果であり、数値はなだらかに上昇を続けた。

21回目(33.7p)よりも22回目(32.5p)の方が1.2ポイント下降したが、23回目(32.3p)から最終回の27回目の数値をみると24回目(34.7p)25回目(34.2p)26回目(34.9p)となっており、数値の推移はなだらかではあるものの上昇傾向を示した。特に、最終回27回目(36.4p)の数値は、最も高い結果が得られた。

読譜課題②の初回(11.6p)と最終回(36.4p)を比較すると、3.1倍の上昇が見られた。読譜の課題への継続的な取り組みは、へ音譜表課題の方がト音譜表課題以上に大きな成果が表れていたと言える。

課題①②の全体的な数値の推移をみると、右肩上がりで上昇を続けており、回を重ねることによって読譜力が定着していることがうかがえる。また、長期休暇をはさむと課題①②ともに数値が下降したことから、継続的な取り組みを行うことの重要性が示唆された。

2. 音楽経験者・未経験者の全体平均値

図3は、27回にわたって実施した読譜課題①②のデータを経験者と未経験者とに分類し、平均値の推移を表したものである。

経験者の読譜課題①の初回は42.9pで、課題①の全体平均値の初回時の得点(29.8p)と比較すると(13.1p)1.4倍高い数値から始まり、未経験者の初回(20.5p)と比較すると(22.4p)2.1倍高い数値から始まっていた。2回目(44.9p)から3回目(50.8

p)4回目(50.0p)5回目(52.5p)6回目(56.3p)まで数値は大きく上昇し続けた。経験者であっても初回から6回目までは右肩上がりで数値が上昇しており、読譜力がついていると言える。7回目(54.9p)でやや下降、8回目(59.1p)で上昇、9回目(57.3p)でやや下降、10回目(60.9p)で上昇するといった上下を繰り返しながらではあったが、平均値の上昇傾向は続いた。11回目(59.2p)12回目(59.6p)13回目(58.5p)と横ばいの数値を示し、夏期休業明けの初回時にあたる14回目の数値は58.6pであった。その後15回目(59.7p)16回目(60.7p)17回目(59.6p)18回目(59.4p)まで大きな変化はみられず安定していた。

19回目(62.8p)でやや数値の上昇が起こり、20回目(61.9p)21回目(63.2p)22回目(63.4p)まで値が横ばいとなる。23回目(66.7p)でやや数値が上昇し24回目((63.8p)最高得点)でやや下降し25回目(62.2p)で再びやや下降する。26回目(67.3p)でやや上昇し、最終回の27回目では(66.4p)となった。初回(42.9p)と最終回(66.4p)では1.5倍の数値の上昇が見られ、大きく読譜力がついていると言える。

一方、未経験者の読譜課題①の初回は、(20.5p)であり課題①の全体平均値の初回時の得点(29.8p)と比べると(9.3p)低い数値であり、経験者の読譜課題①の初回時の得点(42.9p)と比べると(22.4p)低い数値から始まる。2回目(21.6p)3回目(22.4p)4回目(23.2p)5回目(26.5p)6回目(28.6p)7回目(30.3p)8回目(30.8p)9回目(31.8p)10回目(33.2p)まで継続的に数値の上昇が続いた。初回から10回目まで右肩上がりで継続的に数値の上昇が見られ、読譜指導から2カ月半で大きく読譜力がついていると言える。11回目(31.7p)12回目(30.9p)でやや数値が下降し、13回目(32.7p)で上昇する。夏期休業明け初回にあたる14回目の数値は31.4pとやや下降し、15回目(33.3p)16回目(34.9p)17回目(34.4p)18回目(33.3p)となった。19回目(36.0p)でやや数値が上昇し、20回目(37.7p)21回目(37.2p)で大きな変化はなく、22回目(35.3p)でやや下降する。

夏期休業明けの数値は下降しており、読譜力が落ちる傾向が認められた。23回目(38.5p)24回目(40.1p)とやや数値が上昇し、25回目((40.2p)最高得点)26回目(39.9p)と大きな変化はなく最終回の27回目では(39.1p)となった。初回(20.5p)と最



図3 音楽経験者・未経験者全体平均値

終回(39.1p)では1.9倍の数値の上昇が見られ、ト音譜表よりも大きく読譜力がついていると言える。

経験者の読譜課題②の初回は、(19.7p)であり、未経験者課題②の全体平均値の初回時の得点(11.6p)と比べると(8.1p)1.7倍高い数値であった。未経験者の初回(5.6p)と比較すると3.5倍高い数値から始まる。2回目(21.0p)3回目(20.6p)と推移した後、4回目(27.7p)には大きな数値の上昇がみられ、5回目(27.3p)6回目(30.3p)7回目(31.8p)まで上昇傾向が続く。初回から7回目までは大きく数値が上昇しており、この時期に読譜指導の初期段階での大きな効果が見られる。

8回目(38.4p)で再び大きな数値の上昇があり、9回目(33.8p)で下降する。10回目(36.7p)11回目(38.7p)と数値が上昇し、12回目(37.3p)でやや下降し13回目(38.5p)となる。夏期休業明け初回にあたる14回目の数値は(35.1p)まで下降し、15回目(38.1p)と再び上昇すると16回目(38.8p)17回目(38.4p)まで安定した数値で推移する。夏期休業明けに数値が下降していたことから、経験者であってもへ音譜表の読譜力は落ちる傾向が認められた。18回目(39.1p)から最高得点となった21回目までは、19回目(42.5p)20回目(42.8p)21回目(46.0p)と数値が上昇を続けた。その後22回目(43.2p)23回目(41.4p)でやや下降したが、24回目(43.4p)でやや上昇し25回目(42.9p)26回目(43.8p)最終回の27回目では(44.9p)となった。初回(19.7p)と最終回(44.9p)では2.3倍の数値の上昇がみられ、大きく読譜力がついていると言える。

未経験者の読譜課題②の初回は(5.6p)であり、

課題②の全体平均値の初回時の得点(11.6p)と比べると(6.0p)低い数値であった。また、経験者の読譜課題②の初回時の得点(19.7p)と比べると(14.1p)ポイント低い数値となっていた。このことから、未経験者へのへ音譜表の読譜力育成の強化を図る必要性は高いと言える。ちなみに、(5.6p)という数値は、1分間で5つ程度の音符しか読めていないことを示している。この程度の読譜力では、ピアノを弾く際にも学生自身が苦慮する状態であることを示していると言える。2回目(7.4p)から3回目(9.4p)4回目(11.1p)5回目(12.8p)6回目(13.6p)7回目(15.8p)8回目(17.0p)9回目(18.6p)10回目(18.6p)11回目(19.5p)12回目(19.6p)13回目(21.7p)となっており、数値の継続的な上昇が見られた。

しかしながら、夏期休業明け初回にあたる14回目には、数値が(17.4p)と下降し、15回目(22.2p)に再び上昇する。16回目(21.1p)17回目(20.8p)でやや数値が下降する時期が続くものの、18回目(23.3p)以降は19回目(23.6p)20回目(24.8p)21回目(25.9p)まで数値の上昇が続く。22回目(24.2p)でやや数値が下降し23回目(24.6p)は横ばいの数値となる。24回目(28.0p)で再び上昇し25回目(27.7p)26回目(28.3p)となり、最終回の27回目では最高得点(29.5p)となる。

初回(5.6p)と最終回(29.5p)を比較すると5.3倍の数値の上昇が得られ、へ音譜表課題に関しては読譜指導によって飛躍的に読譜力がついたと言える。

経験者の課題①の数値は、初回から上下を繰り返しながら上昇を続け、夏期休業明け初回時の14回目

では下降せず、その後安定した数値を保ち26回目(67.3p)を最高得点として上昇を続けた。

14回目に数値が下降しなかったのは、経験者の課題①のグラフのみであった。このことから、経験者で読譜力がある程度定着している者は、長期休暇を経たとしても、その間に読譜力が低下しにくいことが明らかとなった。

未経験者の課題①の数値は、初回から数値が上昇し、夏休み明けで下降し、その後周期的に上昇と下降を繰り返し、25回目の(40.2p)を最高得点とし上昇が続いた。経験者の課題②の数値は、初回から大きく数値の上昇がみられ、その後数値が安定し夏休み明けで下降し、その後21回目(46.0p)を最高得点とし上昇を続けた。未経験者の課題②の数値は、初回から右肩上がりで数値が上昇し、夏季休業明けで下降し、その後27回目の(29.5p)を最高得点とし上昇を続けた。

経験者・未経験者の課題①②の全体的な数値は、初回時から最終回まで上昇を続けていた。つまり、経験者未経験者問わず、読譜課題への取り組みを実施したことによって読譜力の育成が図られたと言える。また、第1報での報告以降も継続して実践した結果、下記のような新たな知見を得ることができた。

夏休業直後の数値を見ると、経験者課題②、未経験者課題①及び②の数値は一旦下降してしまうが、経験者の課題①のみは数値が下降しなかった。つまり、長期休暇の後であっても低下してしまう読譜力とそうでない読譜力が存在するということが明らかとなった。データの推移の傾向として、未経験者の場合はト音譜表とヘ音譜表いずれの読譜力も定着させることは容易ではなく、長期休暇をはさむと読譜力は落ちてしまう。しかし経験者の場合、ト音譜表の読譜力に関しては長期休暇を挟んでも落ちないものの、ヘ音譜表に関しては落ちてしまう傾向が認められた。このことから経験者であっても、ヘ音譜表の読譜力育成のための指導を図る必要性は高いと言える。

3. 音楽未経験男子学生の事例

図4は、前期後期間計27回実施した読譜課題①②の全体平均値の推移を男子学生の事例として表したものである。この学生は、過去にピアノなどの個人レッスンや音楽系の部活動を経験していない音楽未経験者である。課題①の初回時の得点は(18.0p)であり、読譜課題①の全体平均値の初回得点(29.8

p)と比べると(11.8p)低い数値から始まる。2回目(24.0p)3回目(27.0p)4回目(26.0p)5回目(31.0p)6回目(35.0p)7回目(42.0p)と大きく数値が上昇し、8回目(38p)でやや数値が下降し9回目(42.0p)10回目(44.0p)11回目(45.0p)で再び上昇する。12回目(41.0p)13回目(40.0p)14回目(39.0p)15回目(36.0p)まで下降が続く。16回目(45.0p)で数値が大きく上昇し、17回目(33.0p)で大きく下降し、18回目(36.0p)でやや数値が上昇する。19回目(48.0p)で数値が大きく上昇し20回目(49.0p)21回目(48.0p)となり22回目(40.0p)で下降する。その後23回目(45.0p)24回目(54.0p)となり25回目(51.0p)26回目(48.0p)27回目(49.0p)となる。初回(18.9p)と最終回(49.0p)では2.7倍の数値の上昇が見られた。

課題②の初回時の得点は(18.0p)であり、読譜課題②の全体平均値の初回時得点(11.6p)と比べると(6.4p)高い数値から始まる。2回目(12.0p)から3回目(13.0p)4回目(15.0p)5回目(17.0p)6回目(18.0p)7回目(24.0p)8回目(26.0p)9回目(28.0p)10回目(34.0p)11回目(34.0p)まで数値が右肩上がりで上昇を続けている。12回目(32.0p)から13回目(34.0p)でやや数値が上昇し、夏休業明けの14回目(28.0p)で数値が下降する。その後、15回目(33.0p)で数値が上昇し再び16回目(28.0p)で下降する。17回目(30.0p)18回目(36.0p)で数値が上昇し、19回目(33.0p)20回目(27.0p)と下降し、21回目(27.0p)で横ばいとなり、22回目(40.0p)では大きく上昇する。23回目(40.0p)24回目(38.0p)25回目(37.0p)ではやや数値の下降がみられるが、26回目(44.0p)と数値が上昇し、27回目ではやや下降し(40.0p)となった。初回(18.0p)と最終回(40.0p)では2.2倍の数値の上昇が見られた。

課題①の全体的な数値は、上下を伴い継続的に上昇を続けた。19回目(48.0p)20回目(49.0p)21回目(48.0p)と課題①②全体平均値の課題①の19回目(46.9p)20回目(48.2p)21回目(48.0p)を比較すると、音楽未経験者の学生の数値は課題①②の全体平均値を上回っていた。

課題②の全体的な数値は、初回から11回目まで継続的に数値が上昇し、その後数値の上下を伴いながら上昇を行う。22回目(40.0p)23回目(40.0p)24回目(38.0p)25回目(37.0p)26回目(44.0p)27回目(40.0p)の数値は、課題②の全体平均値の22

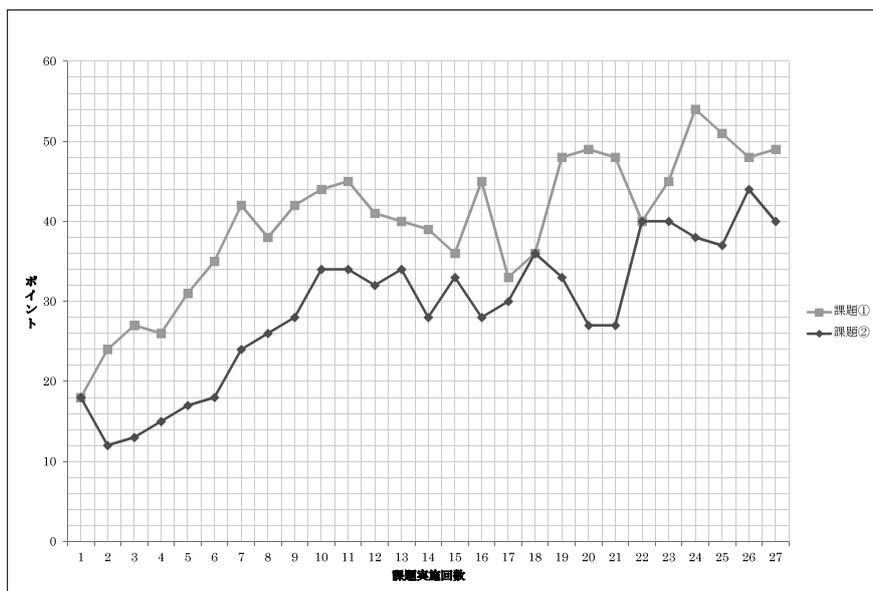


図4 音楽未経験者(男子)

回目(32.5p) 23回目(32.3p) 24回目(34.7p) 25回目(34.3p) 26回目(34.9p) 27回目(36.4p)と比較するといずれも平均値を上回っており、後半で読譜力がついていると言える。全体的に数値は上昇していたことから、未経験者(男子)の事例においては読譜力がついていると言える。

4. 音楽未経験女子学生の事例

図5は、前期後期間計27回実施した読譜課題①②の全体平均値の推移を女子学生の事例として表したものである。この学生は、過去にピアノなどの個人レッスンや音楽系の部活動を経験していない音楽未経験者である。

課題①の初回時の得点は(16.0p)であり、読譜課題①の全体平均値(29.8p)と比較すると(13.8p)

低い数値から始まる。2回目(24.0p) 3回目(24.0p)となり、4回目(36.0p)で数値が大きく上昇し、5回目(28.0p)で下降し6回目(35.0p)で上昇する。7回目(37.0p) 8回目(36.0p)では大きく変化はなく、9回目(27.0p)で大きく下降すると10回目(29.0p) 11回目(28.0p) 12回目(27.0p)までは大きな変動はみられなかった。13回目32.0pから夏期休業明けの14回目(40.0p) 15回目(46.0p)と大きく数値が上昇し、16回目(40.0p)でやや下がり、17回目(47.0p)で再び上昇し、18回目(34.0p)で大きく下降する。19回目(48.0p)で大きく数値が上昇し、その後20回目(49.0p) 21回目(48.0p) 22回目(48.0p) 23回目(49.0p) 24回目(49.0p) 25回目(49.0p)まで横ばいの数値が継続し 26回目(45.0p)でやや下がり27回目(49.0p)となった。

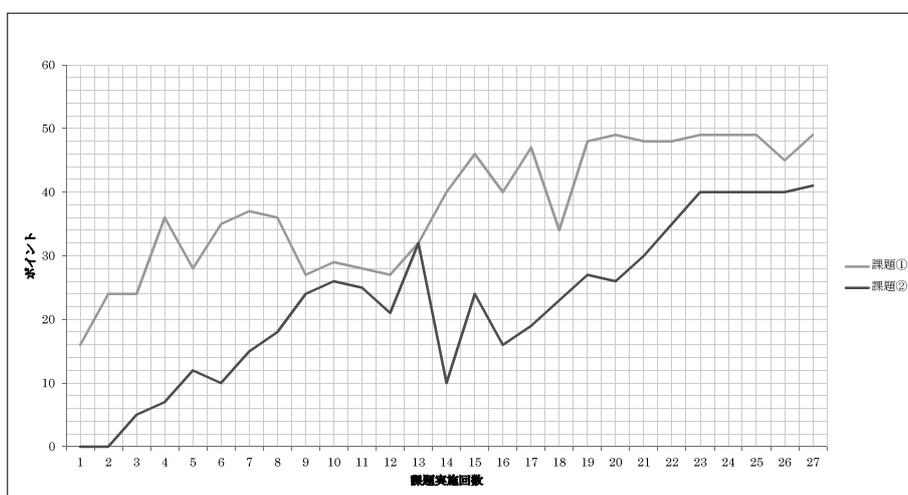


図5 音楽未経験者(女子)

初回（16.0p）と最終回（49.0p）では3.1倍の数値の上昇が見られた。

課題②の初回時の得点は（0p）であり、読譜課題②の全体平均値（11.6p）と比較すると（11.6p）低い数値から始まる。2回目（0p）から3回目（5.0p）4回目（7.0p）5回目（12.0p）6回目（10.0p）7回目（15.0p）8回目（18.0p）9回目（24.0p）10回目（26.0p）まで数値の上昇がみられ、11回目（25.0p）12回目（21.0p）でやや下降し、13回目（32.0p）で大きく上昇が見られる。その後夏期休業明けの14回目（10.0p）で大きく下降し、15回目（24.0p）で大きく上昇し、16回目（16.0p）で再び下降する。17回目（19.0p）から18回目（23.0p）19回目（27.0p）20回目（26.0p）21回目（30.0p）22回目（35.0p）23回目（40.0p）まで数値は右肩上がりで継続的に上昇する。24回目（40.0p）25回目（40.0p）26回目（40.0p）27回目（41.0p）では安定した数値となった。初回（0p）と最終回（41.0p）では、（41.0p）の数値の上昇が見られた。

課題①の全体的な数値は、上下を伴い上昇していた。19回目から27回までの数値は、読譜課題①の全体平均値と比較すると同程度の数値を示していた。

課題②の全体的な数値は、上昇を続け夏休み明けに極端に下降すると、その後右肩上がりで上昇した。23回から27回までは全ての数値で読譜課題②の全体平均値を上回っていた。課題①②において大きく数値が上昇しており、読譜力がついてきたと言える。

5. 課題③④の数値の推移

図6は、前期後期間計27回実施した読譜課題③④の内、1クール目に実施した2度音程～8度音程まで含む課題の平均値の推移を表したものである。課題③については、2度音程まで含む課題の得点が突

出して高く、3度、4度、5度、6度、7度まで含む課題まで段階的に得点上がり、8度音程まで含む課題でやや数値が下降していた。2度音程まで含む課題の得点が高いということは、学生たちの多くは、授業初回時ト音譜表を読むことはできていたと言える。3度音程から7度音程まで音程間隔が広がり、課題の難度が上昇しているが、段階的に数値が上昇しているという点については、読譜力が着実についてきたからだとと言える。

課題④については、いずれの数値も6割前後で推移していた。2度音程まで含む課題の得点は他に比べると高い値ではあるが、課題の難度が順次進行であるということからも、ヘ音譜表を読めていない学生が多く含まれている。3度音程まで含む課題、4度音程まで含む課題と音程が広がるにつれ得点が下降した。5度音程、6度音程、7度音程まで含む課題のあたりで数値の継続的な上昇がみられた。このことから、音程間隔が広がり課題難度が上昇しているにも関わらず数値が上昇をしていることから、ヘ音譜表を読むことができるようになった学生が増加してきた時期であると言える。

課題③の全体数値と課題④の全体数値を比較すると、全ての数値が上回っており、学生たちはト音譜表の方がヘ音譜表より読めているということが明らかとなった。

V. おわりに

本稿では平成22年度に通年で実施した読譜課題への取り組みのデータを報告し、得られた成果について考察した。

本研究では、下記の点が明らかとなった。

①読譜に対する苦手意識が強かった未経験者の学生

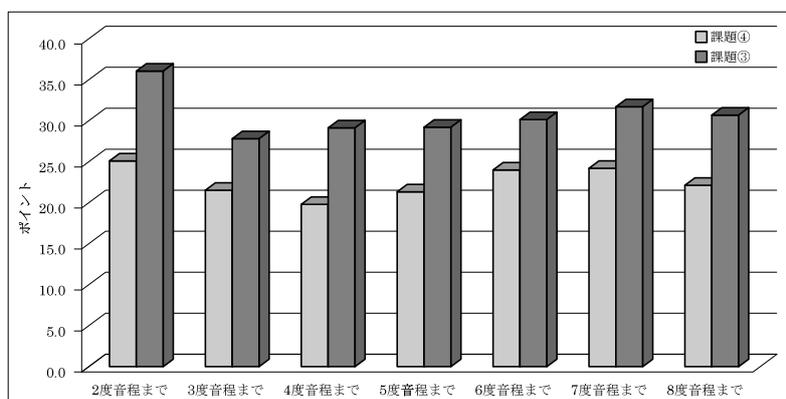


図6 課題③④ 1クール目

たちではあっても、回を重ねるにつれて読譜課題の取得ポイントは徐々に上昇傾向を示したが、夏期休業明け直後には一時期ポイントの低下が顕著に現れていた。これらのことから、読譜力の定着を図るためには、半期の期間での取り組みでは十分な成果を得ることは難しいと言える。

- ②ポイントは上昇したり下降したりといった波が現れる。しかし課題に取り組むようになってからの約2ヵ月間はポイントの上昇が続く傾向が見られることから、この時期の指導の在り方は特に重要であると言える。
- ③経験者、未経験者を問わず、へ音譜表のポイントの方が年間を通じて明らかに低い。さらに、前期の最終回と後期の第1回目のへ音譜表課題のポイントを比較すると、経験者ではあっても夏期休業を挟んで一旦、低下していた。以上のことから、学生たちの読譜力育成を図るためには、ト音譜表以上にへ音譜表の読譜力育成のための強化を図る必要がある。

今回の研究では、個々の学生のデータを詳細に分析するには至らなかった。今後の課題は、個々の学生のデータをより詳細に分析することによって、伸び幅が少なかった学生たちにも十分な成果が得られるような指導の在り方を検討することにある。そのためには、通年での取り組みを継続することによってデータの蓄積を図りつつ、さらなる読譜課題内容の検討と実施方法の見直しを行わなければならない。今後も、学生たちの読譜力育成のための指導の充実に図るための研究に取り組む所存である。

付記

本論文は、平成23年度全国大学音楽教育学会関西地区学会前期研究会において口頭発表を行った研究成果の一部である。

謝辞

本研究において読譜課題の採点に協力下さった本学子ども学科非常勤講師（ピアノ）の先生方へ厚く感謝申し上げます。

VI. 参考文献

- 1) 文部省：学習指導要領 音楽編（試案） 1947.
- 2) 文部省：学習指導要領 音楽科編（試案） 改

訂版 1951.

- 3) 文部省：小学校学習指導要領 第5節 音楽 1968.
- 4) 文部省：小学校学習指導要領 第6節 音楽 1989.
- 5) 文部省：小学校学習指導要領解説 音楽編 教育芸術社 1999.
- 6) 文部科学省：小学校学習指導要領 音楽編 教育芸術社 2008.
- 7) 小倉隆一郎：Music Laboratory を用いた初心者へのピアノ指導 読譜力の向上に着目して 『教育学紀要』文教大学教育学部 第41集 2007.
- 8) Ku Wing Cheong：マレーシアにおける初見の教育 ピアノ教師の教育的視野 音楽教育実践ジャーナル 第7巻 1号 2009.
- 9) 楽譜にどう向き合うか 楽譜の必然性と音楽学習 森下修次 音楽教育実践ジャーナル 第7巻 1号 2009.
- 10) 小池美知子・上村聖子・木村真由美：保育者養成における鍵盤楽器指導に関する研究⁽³⁾ 読譜力育成のための指導について 今治明德短期大学研究紀要 第29集 2005.
- 11) 二宮貴之・櫻井琴音：音楽経験者・未経験者における読譜力育成に向けた取り組み 課題考案とデータ分析を中心に 西九州大学子ども学部紀要 第2号 2011.
- 12) 全国大学音楽教育学会・九州地区大学音楽教育学会編：新しい表現を取り入れた、保育者養成のためのピアノテキスト 株式会社 河合楽器製作所・出版部 2009.
- 13) 小林美実：こどものうた200 チャイルド本社 第91刷発行 2008.

読譜課題①

氏名

学籍番号

平成 年 月 日

Musical score for reading exercise 1, treble clef, common time, 31 measures. The score is divided into seven staves with measure numbers 6, 11, 16, 21, 26, and 31. The melody consists of eighth and quarter notes, with some beamed eighth notes and a triplet of eighth notes in measure 11.

資料 1

読譜課題②

氏名

学籍番号

平成 年 月 日

Musical score for reading exercise 2, bass clef, common time, 31 measures. The score is divided into seven staves with measure numbers 6, 11, 16, 21, 26, and 31. The melody consists of eighth and quarter notes, with some beamed eighth notes and a triplet of eighth notes in measure 11.

資料 2

讀譜課題③-①



讀譜課題③-②



讀譜課題③-③



讀譜課題③-④



讀譜課題③-⑤



讀譜課題③-⑥



讀譜課題③-⑦



讀譜課題④-①



讀譜課題④-②



讀譜課題④-③



讀譜課題④-④



讀譜課題④-⑤



讀譜課題④-⑥



讀譜課題④-⑦

